

## 室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニット「室蘭工業大学の語学教育におけるより良い動機づけのための多面的研究」研究成果報告

著者	三村 竜之
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	16
号	1
ページ	131-134
発行年	2018
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/00009622">http://hdl.handle.net/10258/00009622</a>

室蘭工業大学  
言語科学・国際交流ユニット

「室蘭工業大学の語学教育におけるより良い動機づけ  
のための多面的研究」  
研究成果報告

三村竜之

**Research Project Report:  
“Studies on Better Motivation in Foreign Language  
Learning from Various Angles”  
by Linguistic Science and International Relations  
Research Unit, Muroran Institute of Technology**

**MIMURA Tatsuyuki**

**要旨**：本稿は、室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニットが取り組む言語文化に関する研究と教育の成果報告である。同ユニットに所属する教員が、言語学、言語教育、異文化理解の観点からいかにして外国語教育（日本語教育）の改善に取り組んできたか、その成果を広く公表することを目的とする。

**キーワード**：外国語教育 動機づけ 対照研究 異文化理解

## 1. 背景

室蘭工業大学の教養教育に携わる教員の内、特に言語（外国語としての日本語も含む）や文化の教育と研究に携わる十数名の教員から「言語科学・国際交流ユニット」は構成されている。毎年度、室蘭工業大学における言語並びに異文化理解の教育をいかにより良いものとするかを旨し、研究プロジェクトに取り組んでいる。今年度（平成 29 年度）は、「室蘭工業大学の言語教育におけるより良い動機づけのための多面的研究」というテーマの下、各教員が次の三つの視点から言語・文化教育の改善を目指して研究に取り組んだ：1) 外国語教授法、2) 対照言語学、3) 異文化理解。本稿を通じて、同研究プロジェクトの成果報告会（2017 年 12 月 8 日・室蘭工業大学教育・研究 2 号館 Q502 号室にて）の概要を述べることにする。

なお、いずれの教員も、上記の三つの視点に基づいて設けられた研究グループの一つに属し、研究を行っている：

## 1) 外国語教授法研究の視点

Michael Paul Johnson 准教授、Brian Nollaig Gaynor 准教授の二名が所属。学習者への動機づけの強化を図るための効果的な教育方針、教育計画、教育の実践方法の探求を通じて、外国語教育の方法の改善を目指す。

## 2) 対照言語学の視点

橋本邦彦教授、塩谷亨教授、島田武准教授、筆者の四名が所属。言語の普遍性と多様性を学習者に意識させ、学習言語自体への興味を喚起させることにより動機づけを高めるべく、教材作成と方法論の構築、並びに理論的背景の整備を目指す。

## 3) 異文化理解研究の視点

クラウゼ小野マルギット教授、小野真嗣准教授、Eric Thomas Hagley 准教授、曲明准教授、山路奈保子准教授の五名が所属。体系的な言語学習とそれに並行して行われる学習言語を用いた異文化体験のいずれをも効果的な動機づけとして位置付け、実際の教育に応用した指導法の確立を目指す。

**2. 研究成果報告の概要**

前節にて触れた研究成果報告会では、各研究グループの代表者が 20 分程度の口頭発表を行いその成果を報告した後、他グループのメンバーと質疑応答を重ねた。本節では、各研究グループの研究成果の概要を示す。

## 1) 外国語教授法研究グループ（報告者: Gaynor 准教授）

“The connection between vocabulary size and speaking proficiency of Japanese university students learning English as a foreign language”

Previous research has highlighted the connection between vocabulary size and overall English language proficiency, including spoken communication. However, in low-exposure foreign language environments like Japan where English is essentially confined to the classroom and there is limited vocabulary input, the development of oral and aural language competencies is quite difficult. The goal of this research therefore is to investigate the link between receptive vocabulary knowledge and spoken language proficiency. To this end we have three main aims:

- 1: To determine the proficiency features of students' spoken L2 English.
- 2: To investigate the link between students' L2 English vocabulary and their spoken language ability.
- 3: To investigate the motivational and affective influences on students' L2 spoken language ability.

The research design involves a combination of elicitation tasks to assess students' spoken English language performance and correlate this with both their results in extensive reading and their TOEIC scores. Furthermore, we will also examine the effect of students' motivation to learn English on proficiency and test scores. In doing this we hope to be able to identify the factors that

best determine student proficiency and in turn, implement a revised curriculum that can best make use of these factors to enhance future pedagogy going forward.

2) 対照言語学研究グループ（報告者：筆者）

「リズムで学ぶ英語の発音とリスニング：対照言語学の成果を応用して」

「対照言語学」班は、室蘭工業大学における英語教育に資する教材の開発を目指し、学習者の母語である日本語と習得対象である英語の間の類似点並びに相違点の詳細な記述・分析を行うとともに、実際の授業にいかにも成果を応用するかを研究目的とする。学習者が習得すべき言語の諸側面は、発音、語形変化、語順、語義、語の用法など多岐にわたるが、今年度の報告書では最も習得が困難であると考えられる発音を取り上げる。英語は綴り字通りには発音されない傾向の強い言語であるという認識に立ち、その原因は日本語とは異なる仕組みのリズムを英語が有しており、そのため本来の発音が崩される(reduction)という観点から、発音並びにリスニングの指導と教材開発の方策を提案する。併せて、報告者が担当する授業での実際の応用例と学習効果についても報告する。

3) 異文化理解研究グループ（報告者：小野准教授）

「外国語学習への動機付けとしての異文化間コミュニケーション活動をより効果的にするためのレディネス形成と事後評価」

本発表は、本学で実施されている海外語学研修、海外研修、異文化交流の各科目で実施されている教育活動について改善を図るものである。受講する学生の語学動機付けとなるきっかけや語学自体の進捗の見える化を行うことを主たる目的とする。従前の事務的な事後アンケートの実施ではなく、受講前と受講後における学生個々の学修調査回答に基づいて、学生の学習前レディネス形成及び学習後の事後評価のあり方を検討した。

英語圏への研修として、アメリカ及びオーストラリアへの渡航を本学は2本運営しているが、帰国後の学生は自身のリスニング力および基本語彙力の不足を痛感することによる英語再学習への動機付けがなされていることが読み取れた。上記の渡航のうち、オーストラリアは双方向交流を実施しており、先方からの研修生受入れの対応チューターの業務においても、再度従事したい意思や外国人接触の自信も事後アンケートより解釈でき、語学への動機付けの要素として認められるものであった。

一方、中国研修では既に事前・事後の Can-Do リストによる学生自己評価体制が整備されており、それを踏襲する形で、通常の座学授業の他、特別授業としての多機関合同による異文化交流の授業にも応用し、事前・事後の学生自己評価を試行した。統計的な処理は今後の課題となるが、学生の学習前レディネス形成と事後評価に関する一つの制度設計や体制整備として位置づけることができると考えられる。今後は、上記の各科目を対象に統一的で比較分析可能な評価方法も今後念頭に入れ、改善を図っ

ていくことも求められる。

### 3. おわりに

以上、室蘭工業大学言語科学・国際交流ユニットの本年度の研究教育プロジェクトの概略と成果の概要を報告した。次年度は、また新たな視点から言語文化教育の改善を目指して研究プロジェクト取り組む予定である。

#### 執筆者紹介

氏名：三村竜之（みむら・たつゆき）

所属：室蘭工業大学大学院工学研究科・ひと文化系領域

Email：m76tatsu@gmail.com